

地獄へ行つた少年

ドイツ

昔むかし、あるところに、ひとりの少年がいました。この子には、お父さんもお母さんもいませんでした。世話をしてくれる人がだれもいなかつたので、ぼろぼろの服を着て、いつもお腹を空かせていました。

あるとき、少年は村を出て、どこまでもどこまでも歩いて行きました。しまいに大きな森に入つてしましました。どこまで行つても家もなく、だれにも会いませんでした。鳥たちもだまりこんでいました。少年はすっかり悲しくなつておいおい泣きました。

そのとき、とつぜん、上品な身なりの男の人があらわれました。男の人は、少年に、「どうしてそんなに泣いているんだね」ととききました。

「だつて、お父さんもお母さんも死んでしまつたし、だれもぼくの世話をしてくれない。食べる物も着る物もないんだ」と、少年が答えると、男の人は、いいました。

「そんなことなら、わたしといっしょにおいで。わたしの所ではたらかせてあげよう」少年は男の人について行きました。森の中を何時間も歩いて、ようやく大きな陰気くさい家に着きました。男の人は、少年を中へ入れて、食べ物や飲み物をたっぷり出してくれました。少年がお腹いっぱいになると、男の人は、かかとが鉄でできている靴をくれていきました。

「このかかとがすりへるまで、ここではたらくんだよ。でも、おまえの仕事は簡単だ。あそこの大なべの下の火を、いつもよく燃やすことだけだ。ただし、けつして大なべの中をのぞいてはいけない。ちゃんと仕事をしてくれたら、うんと給料をやるからな」少年は、約束どおりはたらきました。

何年もたつたある日のこと、少年は、大なべの中を見たくてたまらなくなりました。そこで、用心深く、大なべのふたを持ち上げてみました。するとまあ、大なべの中には、少年のなくなつたおばあさんがいたのです。おばあさんはいいました。

「ぼうや、おまえは自分がどこにいるのか、分かっているのかい」「いいえ。ぼくはどこにいるの」

「おまえがいるのは地獄だよ。そして、おまえのご主人は悪魔なんだよ。わたしのいうことをよくお聞き。やすりを探してきておまえの靴のかかとをすりへらすんだ。それで、給料をはらつてくれようとしたら、金貨や銀貨をくれても二クロイツァーしか受け取つ

ちやいけないよ。そして、背中を見せないであとずさりしながら地獄から出て行くんだ」
おばあさんは、そういうて、少年がうまく逃げ出せるように、無事を祈つてくれました。それから、

「大なべの下の火をあまり強く燃やすと、わたしは苦しくてしようがないから、ほどほどにしておいてくれよ」とたのみました。

少年は、大なべの火を小さくしてから、やすりを探しました。やつとやすりを見つけると、靴のかかとがなくなるまでこすりました。それから悪魔の所に行つて、いいました。

「ぼくの靴のかかとがすりへりました。くにに帰らせてください」

悪魔は、靴のかかとを調べると、少年をテーブルのところに連れて行きました。テーブルには、お金が山と積まれていました。

「おまえの給料はここにあるぞ。いくらでも持てるだけ持つて帰るといい」と悪魔はいました。少年は、三クロイツァーだけ取ると、そのまま背中を見せないようになとづきりして、地獄から出て行きました。悪魔は、恐ろしい顔で笑いながらいました。

「おまえのばあさんの入れ知恵だな」

悪魔は、少年をつかまえることができませんでした。

少年は、どんどん歩いていつて、とうとう森からぬけだしました。すると、道ばたに、男の人がひとりしゃがみこんでいました。男の人は、みじめで貧しそうでした。

「何か食べる物をめぐんでくれないか」と、男の人はたのみました。

「三クロイツァーしか持つてないんだけど、それでよかつたらあんたにあげるよ」

少年がお金をさし出すと、男の人は立ち上がって、

「わたしは神なんだよ。おまえに願い事を三つかなえあげよう」といいました。少年は、ちよつと考えていました。

「撃てばかならず命中する鉄砲と、命令すると何でも飛びこんで来る背負いぶくろと、だれでもおどらせるヴァイオリンをください」

たちまち、鉄砲とぶくろとヴァイオリンが目の前にあらわれました。少年はお礼をいつてすぐにかけ出そうとしました。ところが、いちばん大切なものをお願いするのをわすれているのに気づきました。そこで、ふりかえつて、

「あつ、永遠の心のしあわせをお願いすればよかつたなあ」とさげびました。神さまは

わらいながら、

「おまえは心がやさしいから、それはおまけにあげることにしよう」といいました。少年は、もういちどお礼をいって、旅たびをつづけました。

まもなく、女人人がふたり、大きなかごを背負って歩いているのに出会いました。ひとりのかごには、せとものがいっぱい入っていて、もうひとりのかごには、たまごがいっぱい入っていました。少年は、

「ねえ、おばさんたち、ぼく、お腹がペこペこです。どうかおわんをひとつとたまごをふたつもらえませんか?」とたのみました。

女人たちは、怒おこつてどなりだしました。

「なんだって、おまえみたいな子にめぐんでやらないといけないんだ。そんなこといつてないで、せつせとはたらくんだよ」

少年は、ヴァイオリンを取り出してひき始めました。たちまち、女人たちはおどり始めました。ふたりは飛んだりはねたりしておどり回り、とうとうせとものもたまごも、ぜんぶこわれてしまいました。

少年は旅を続けました。すると、りっぱな身なりの学校の先生に会いました。少年は、「ねえ、あそここの垣根がきねに鳥がたくさんとまっているでしょう。ぼくが一発撃つたら、ぜんぶいばらの垣根の中に落ちるんだよ」といいました。先生は、怒つて、「そんなことできるはずがない。ばかな子だ」といいました。

「できるさ」と、少年はさけびました。そして、

「落ちた鳥をぜんぶひろっておくれよ」といいました。

少年が鉄砲を撃つと、鳥がぜんぶいばらの垣根の中に落ちました。先生は、鳥をぜんぶひろい集めましたが、いばらのとげで、服がずたずたに破やぶれてしまいました。

少年は旅を続けました。すると、今度は、お金持ちの商人に会いました。商人は、腰こしに巻まいてある革帶かわおびの中に、お金をぎつしりつめこんでいました。少年は、

「ぼくに、三クロイツァーでいいからくれませんか」といいました。商人は怒つて、「なんだと。なんでおまえに三クロイツァーやらなきやならんのだ。おまえなんかにやつめのあかだつてやるもんか」とどなりました。少年は、

「ぼくのふくろに入れ」とさげびました。商人は、あつという間に少年の背負いふくろの中に入りました。そして、出してもらうのに、けつきよく三クロイツァーやらなくて

はなりませんでした。

さて、ふたりの女の人と先生と商人は、裁判官のところへかけこんで、「あの少年はまほう使いだ」とうつたえました。裁判官は、少年に死刑の判決をくだしました。

少年は、死刑台に連れていかれるとき、裁判官にいました。

「どうか、最後の望みをかなえてください。わたしのヴァイオリンと背負いぶくろを見せてください。もう一度さわってみたいのです」

裁判官は、少年にヴァイオリンと背負いぶくろをわたしてやりました。少年は、ヴァイオリンをひき始めました。たちまち、みんながおどりだしました。裁判官もふたりの女も先生も商人も、町の人たちも、一生懸命、おどつたり、はねたりしました。みんないき息もたえだえです。

少年は、背負いぶくろを手に取つて、

「ぼくのふくろに入れ」とさげびました。すると、裁判官もふたりの女も先生も商人も、ふくろの中にとびこんでしました。

「出してくれ。出してくれ。お願いだから出してくれ」と、みんなは泣きさげびました。

少年は、

「じゃあ、もうぼくの旅のじやまはしないかい」といいました。

「しない、しない。けつしてじやましない」

みんなが約束したので、少年はふくろから出してやりました。

こうして、少年は旅をつづけました。そして、せつせとはたらいて、りっぱな大人になりました。死んでからは天国へ行くことができましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小沢俊夫編訳／ぎょうせい